

平成 26 年度 春季勉強会

『婦人科疾患を診る・読む・撮る』

公益社団法人 日本放射線技術学会 近畿部会
学術委員会

「婦人科領域の病気の発生・治療」

京都大学医学部附属病院 馬場 長

近年、産婦人科の診療において放射線部との連携は必須となっている。

婦人科臓器は骨盤内に存在するため、特に骨盤部の MRI 画像検査は腔・子宮・附属器の性状・構造および周辺臓器との位置関係を見るのに適した検査であり、子宮や卵巣の腫瘍の鑑別・診断・進展範囲の同定だけでなく、子宮奇形の描出にも優れる。また、近年では妊娠中にも用いられることが増え、胎児・胎盤の異常だけでなく、子宮筋層の評価や、妊娠に伴った子宮や卵巣の腫瘍の性状診断にも利用されている。さらに、CT は悪性腫瘍の拡がりや再発を診断する目的だけでなく、造影検査で産科出血や術後出血の診断、出血点の同定にも用いられる。FDG-PET などの核医学検査や子宮頸癌や再発婦人科癌に対する放射線治療も婦人科診療には欠かせない。

本講演では産婦人科から放射線診断・治療をお願いすることが多い疾患について病態・治療を紹介し、明日からの診療の一助としたい。

「婦人科領域の画像診断」

京都大学医学部附属病院 木戸 晶

婦人科領域の画像が他の領域と異なる特徴のひとつとして、子宮・卵巣がホルモンの影響、例えば加齢や月経周期、妊娠、外因性のホルモン等の影響を受けてその正常の形態を変化させることが挙げられる。そのため、“正常”と考える所見には幅があり、“異常”ではない“反応性の変化”をまず知って頂くことが大切になる。

疾患となると、良性病変では、筋腫、腺筋症、内膜症、良性卵巣腫瘍、悪性病変では子宮頸癌、子宮体癌、悪性卵巣腫瘍と多数が含まれる。これらの疾患で、“放射線科医が何を見ているのか？”を知って頂ければ、実際に撮影する診療放射線技師の方々が、“如何に”そして“何に留意しながら撮影したらよいのか”を考えて頂くことができるのではないかと思います。

今回の講演では、このような視点から主に MRI 画像を中心に、最近の知見も含めながら幅広く婦人科領域の症例について概説する予定である。

「婦人科領域の撮影方法」

京都大学医学部附属病院 長尾 泰輔

婦人科領域における MRI は、他モダリティと比べて組織のコントラストを高く描出することができ、病変の形態や性状を把握するために非常に有効である。われわれ診療放射線技師は MRI が持つ高い組織コントラスト分解能を生かせるように撮像を行うべきだと考える。

婦人科領域の撮像は比較的アーチファクトが発生しやすい。例えば呼吸による腹壁の動きによるもの、腸管自体の動きまたは腸管内部のエアーによるものなどさまざまな原因があげられ、その対策方法はいろいろと考えられる。一方、撮像パラメータの設定によっても組織間のコントラストなど画質は優位に変化する。撮像時間、コントラスト、アーチファクトなどさまざまな面に留意しながら撮像を行う必要がある。

本講演では当院で行われている撮像方法を紹介し、婦人科領域の MRI を撮像する際に必要な工夫や注意する点などを解説する予定である。